

海外ネットワークと産地の多元化で 原料の安定的・長期的確保を実現

JA全農では、家畜に給与する配合飼料用の原料を世界各国から輸入しています。膨大な量の原料を安定供給し続けるには、穀物生産の天候リスクや取引相手国の為替リスクなどさまざまな変動要因のコントロールが不可欠です。前号で紹介した米国での全農の取り組みに続き、更なるグローバルネットワークについてご紹介します。

南米ブラジル、北米カナダでの 取り組み

ブラジルは生産量と輸出量の増加を背景に年々存在感が増しており、今後北米地域での耕作地開拓により生産・輸出の拡大が見込まれます。JA全農ではブラジルでの飼料穀物のサプライチェーンを強化するため、2015年に全農グレインの子会社として全農グレインブラジルを設立しました。

更に17年にはブラジルの大手穀物企業アマッジ社と穀物メジャーのルイ・ドレファス社の合弁会社「全農グレインブラジル」が出資参画し、社名をALZホールディングス株式会社に変更、集荷から輸出までの一貫事業を行っています。

ALZ社はマピトバ地区(ブラジル北東部の新興

な農協組織と連携し、それらの農協組織からの購買も行っていきます。

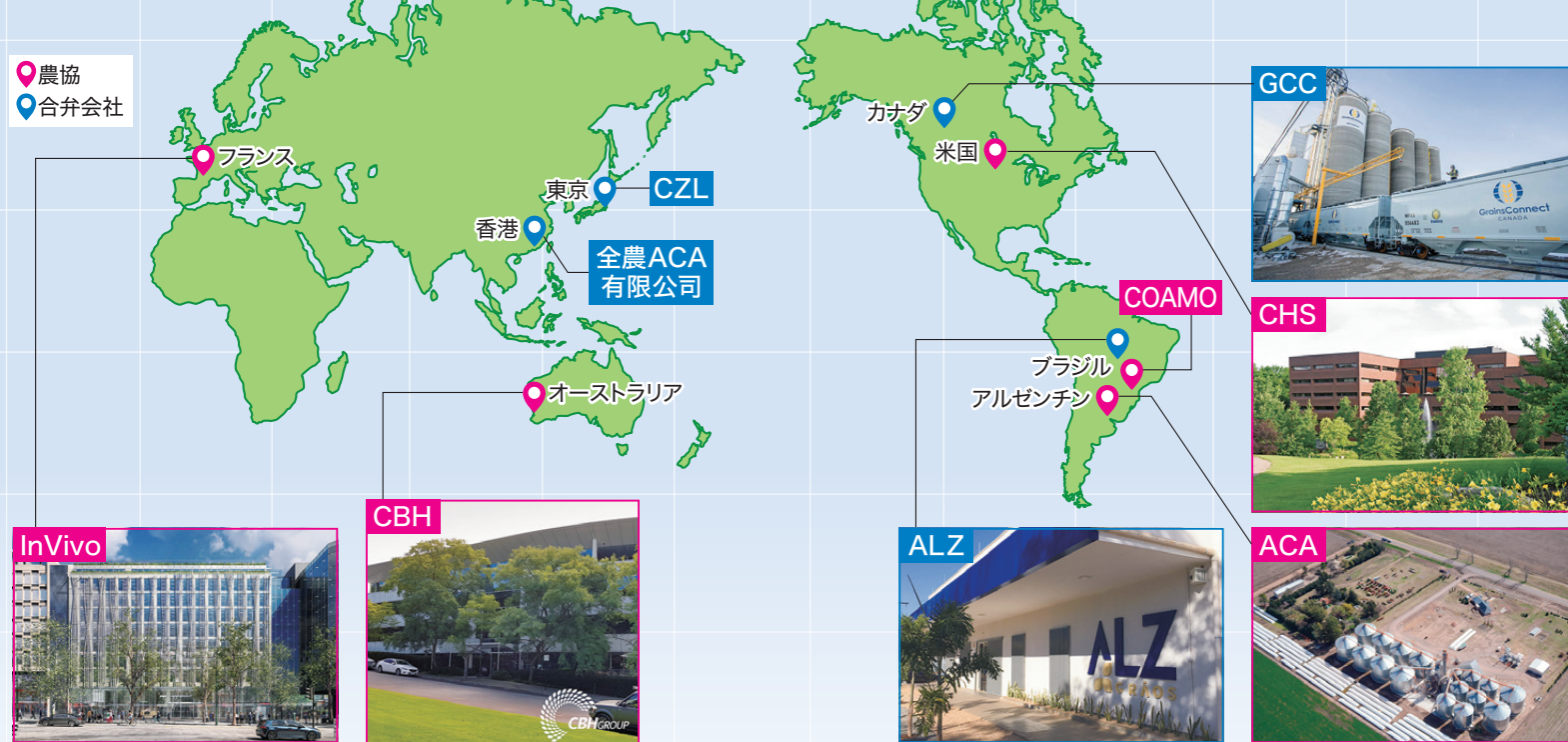
海外の農協組織との取り組みには、①長期安定取引の協定契約を締結する ②相互出資による合弁会社を設立する などの方法があります。

ACA農協は、南米大陸最大のアルゼンチン農協連合会です。JA全農は1964年からACA農協との農協間取引を開始し、マイロ・とうもろこしを中心に、これまで約1000万トンの飼料原料を日本に輸入しています。また、2011年には全農グレインとACA農協との合弁会社である全農ACA有限公司が香港に設立され、中国向けに米国産やアルゼンチン産の大豆販売を行っています。

CBH農協は、オーストラリア大陸最大の西豪州農協です。JA全農は1971年からCBH農協との農協間取引を開始し、肉牛向けに重要な大麦をはじめ、えん麦やループピン・小麦・菜種とさまざまな品目を輸入しています。

CHS農協は、北米最大の農協連合会です。年間5200万トンの穀物を、世界65カ国へ輸出しています。JA全農はCHS農協から米国西海岸積み目のとうもろこしを輸入しています。また2012年にはJA全農とCHS農協の合弁会社であるCZL社が設立され、小麦や大麦の輸入を行っています。

JA全農は他にも、ブラジル最大の**COAMO農協**やフランス最大の**InVivo農協**と情勢交換を行い、穀物輸入の実績とノウハウを培っています。



世界の有力農協組織と連携する 「農協間取引」

JA全農は、配合飼料用原料の輸入について、民間の穀物輸出会社との取引のほか、世界の有力

現地よりメッセージ



幸田 祐一郎氏
全農グレインブラジル
ホールディングス
有限会社
マネージャー

日本食がユネスコ無形文化遺産に登録されました。今後、日本の農畜産物は他国への進出も可能だと考えられます。一方、飼料原料の国際マーケットでは既に他需要国との戦いが始まっています。高品質な飼料原料の安定供給を通じて、地球の裏側から日本の農業を盛り上げ、農畜産産物を世界マーケットに広められるようなお手伝いがしたい。南米ではJA全農の知名度もまだまだ高くありません。トレーディングや経営戦略、情報の収集・発信など全ての業務において初めての事も多いです。これからも固定観念にとらわれず、新たな世界を切り開くという感覚で日々の業務に取り組んでまいります。



穀物産地4州の総称)に6基の内陸エレベーターを所有し、地区内のマフニオン州イタキ港ではTEGRAM社の輸出エレベーターを共同運営しています。また船積能力の拡大に向け輸出エレベーターの拡張工事に着手、20年の完工を目指しています。

カナダは大麦・小麦・菜種的主要産地です。JA全農では、肉牛生産に必要な不可欠な大麦と、小麦及び菜種を日本の製粉・製油メーカーへ供給し、ふすま、菜種粕を安定的に調達するため、15年に豪州の穀物集荷販売会社グレインコープ社との合弁会社、グレインズコネクト・カナダ・オペレーションズ株式会社(GCC社)を設立しました。

GCC社は3基の内陸エレベーターを運営しており、現在建設中の4基目も年内に完工予定です。また、18年、GCC社はカナダの穀物・食品会社、



貨車による出荷(GCC)